



9月号

ひだまり

今月のエッセー

縁

「チリン、チリーン♪」

どこからともなく、涼やかな音色が聞こえてきます。

つい先月のことです。小京都といえ
ば、全国的にいろいろな地域にあります
が、小江戸と呼ばれる場所を皆さんご存
じでしょうか？

「世に小京都は数あれど、小江戸は川越ば
かりなり」と謳われているぐらい有名な
のが川越です。その川越にあります、川
越氷川神社へ今回縁があってお参りに行
って来ました。

ここは二組の夫婦神が鎮座されている

編集後記



総合研究センターに入って早くも
半年が経とうとしています。学びの中
で成長できているのか、しっかりと伝
えられているのだろうか。悩みながら
も漫然と過ごしてしまう日も多く、自
分が情けなくもなります。

振り返ると、今年は夏真っ盛りの
はずの日に鈴虫が鳴くなど、今の季節が
分からなくなる日もよくありました。
それでも合間を縫うようにセミが懸
命に鳴いていたのが印象的でした。
鳴ける時に鳴けるだけ鳴く。「これ
でもか、っていうくらいにやるんだ。」
中学、高校とお世話になった恩師の口
癖がふと頭をよぎりました。

◆久松彰彦
ひまわりしょうげん

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

ことから古くより縁結びの神として信仰
され、地域の方に限らず多くの方が毎日の
ようにお参りに来られるほど有名になり
ました。

そしてここでの名物になっているのが
「縁結び風鈴」です。

風鈴の紙の部分に当たる木の板に、それ
ぞれが思い思いの願いごとを書き込み奉
納します。

昨今の晩婚化による影響の為か、実際に
神社の境内に足を踏み入れてみると、老若
男女たくさんの方々が来られています。

「良縁がありますように・・・」

その様子を見て、どんなに時代や時間が
変化しても神仏に対する願いは変わらな
いのだと強く思いました。

ここは縁を結ぶ神社であり、良縁を求め
て多くの方が来られるわけですが、こうし
て一緒にお参りするだけでも「袖振り合う
も多生の縁」ということを感じた一日とな
りました。

◆伊藤正法
いとうしょうほう

梅雨入りしたのに猛暑が続いたか
と思えば、梅雨明けした途端に雨が
降り続いたり・・・。気まぐれな今
年の夏の暑さも、幾分か和らいでま
いりました。そんな時節に道端でコ
スモスが咲いているのを見かけると
お彼岸の訪れをしみじみ感じます。
春と秋にあるお彼岸は春分の日・
秋分の日を中日として前後三日間の
計七日間です。この期間は先祖を偲
び、今の自分があることを感謝して
供養の法要や墓参りをします。
彼岸は元々サンスクリット語（イ
ンドの古語）のパーラに由来し、こ
の世を越えた理想の世界、遙か彼方

彼岸 ひがん

仏教のことば



のことを指します。転じて仏教では
悟りの境地を意味し、解脱した者が
安住する場所を指します。
彼岸に至ることを「到彼岸」とい
い、サンスクリット語でパーラミタ
ー（波羅蜜多）といいます。いつも一
緒にお唱えしている般若波羅蜜多心
経とは、「彼岸に至る」ための智慧（
般若）のお経という意味なのです。
御先祖様に思いを馳せると同時
に、自らも彼岸に至ることが出来る
ように精進するのがお彼岸です。そ
んな思いを込めて、般若心経をお唱
えできたなら、きっと良いお彼岸に
なるのではないのでしょうか。

◆本田真大
ほんだしんだい

法のお話



二年度
深澤亮道
ふかざわりょうじょう

愚かな人

私がお坊さんの道に進もうと決意したのは大学4年生の時でした。まだ僅かな期間しかこの道を歩んでいませんが、周りからはそれだけで違う世界の人のように見られることもあります。しかし、お坊さんとして生きていても反省の日々。いつも煩惱にまみれているな、とかまだまだ修行が足りないなと思うことばかりです。

江戸時代の後期、良寛さんという曹洞宗のお坊さんがいました。有名なお坊さんなので、もしかしたら名前を聞いたことがある人がいるかもしれません。良寛さんは山の中の庵に住み、常日頃から子どもたちと手毬をついて遊んだり、日が暮れるまでかくれんぼをしていたという話は有名です。

またお酒も好んで飲んでいたそうです。良寛さんの号(師匠から与えられる名前)を「大愚」といいます。愚とは字の通り愚かなという意味ですが、お坊さんの号で大愚とは不思議な感じがします。

良寛さんのエピソードや、その大愚という号からはとても立派なお坊さんとは言い難いのですが、次のような話が残っています。

良寛さんは師匠である国仙和尚から悟りの証明を受けます。その時に国仙和尚は次の言葉を良寛さんに贈っています。

良也如愚道転寛

(良や、愚の如くして道うたた寛し)

騰々任運得誰看

(騰々任運、誰か見ることを得ん。)

「わが良寛は、その号が大愚とあるように、外見はまるで愚人のように見えるが、実は暗黙のうちに道を修めて実践していることは誰もかなわない。ゆつたりとしていて全てを自然に任せていながら、それでいて道を求めて真髓を会得していることは、誰も見抜くことができない。」

ここでいう「愚」とは、ただの愚か者という意味ではありません。昔の中国では、弟子たちに愛情をこめて評された言葉に、愚という言葉がよく出てきます。世間の人が見れば、馬鹿に見えるほど真面目に、誠実に道を実践している者を指しているのであって、これはむしろ称賛の言葉だったのです。

お坊さんといえど、何一つ隠すことをしなかった良寛さんは、とても人間味溢れるエピソードがたくさん残っています。もしかして、本当に周りからは「愚かな人」と思われていたのかもしれない。しかし、子どもと遊ぶこともお酒を飲むことも良寛さんにとってお坊さんとして生きていくこと、そしてその道を実践することだったのかもしれない。

私たちはよく、他人からの評価を気にしてしまします。しかし、周りからの評価を気にするのではなく、自然の赴くままに道を実践した良寛さんの生き方は、今の私たちに色々と教えてくれているような気がします。

そんな良寛さんを見習いながら今宵も一杯、「いただきます。」

お寺散策

諏訪山 吉祥寺

東京大学からほど近く、本駒込駅から歩いて五分ほどのところに静かに佇むお寺があります。「諏訪山 吉祥寺」というお寺です。中央線の駅名に「吉祥寺」とありますが、その由来となったお寺でもありません。

江戸時代、明暦の大火と呼ばれる大きな火災がありました。二日間にも及ぶ大火災は江戸の街並みを大きく変貌させ、吉祥寺の門前にあった町もまた、火災によって焼失してしまったのです。住む場所を失った人々は、現在の武蔵野市周辺に移り住むことになりました。しかし、吉祥寺の門前に愛着を持っていた人々は、移り住んだ場所にも吉祥寺の名前をつけてお寺とのつながりを大事にしたそうです。

その後の火事で現在は本駒込に移った吉祥寺ですが、約二百年前に建てられた立派な山門からは変わらぬ威厳を感じるこ



吉祥寺山門



◆山内弾正



ひだまり書房



幸せのメカニズム

実践・幸福学入門

著 前野 隆司

幸せというのはもちろん人それぞれですが、あえてそれを調べようというのがこの幸福学だそうです。

調査の結果、幸せに大きく関係しているものが4つの要素に分類されています。それは「ありがとう!」「やってみよう!」「あなたらしく!」「なんとかなる!」というものです。

この最初の要素に関して、5万円を渡された人がどのような使い道をするか、という実験が初会されています。5万円もあれば自分のために好きなものを食べたり買ったり、色々考えられますね。しかしこの調査によると、相手のためにお金を使った人の方が幸せになるといいます。ただし、条件があります。それは見返りを求めないことです。

仏教にも「見返りを求めず相手のために何かをする」という意味の言葉で「布施」があります。仏教もやっぱり幸せにながっているのだなと思わされた一冊です。

◆久松彰彦